

巻頭言

歴史分科会長 瀬谷高校 長島 一浩

新科目の歴史総合が始まっています。近代化・大衆化・グローバル化など、広範かつ難解な概念を盛り込んだ「饒舌」なこの新科目に対して、粘り強い、積極的な実践の試みが繰り広げられており、既に多くの成果が得られていると思われまふ。さらに今後は、よりヴォリュームアップを遂げた日本史・世界史探究への展開を迎えて、効果的実践のための入念なる準備、議論が各方面でなされており、本分科会の諸活動・イベントでもその一端を担うべく、鋭意努力させて頂いております。

いずれにせよ、新指導要領の趣旨やコンセプトに意を傾け、着実に取り組まなくてはならないのは当然ですが、そもそも、今回の改訂で要求されている内容は、主題学習などのもとより、本質的には従来からの歴史学習の課題克服の想定内にあるものであり、ICTの活用促進も含めて、「パラダイム・チェンジ」等と殊更に騒ぐべき事柄ではないと思ひます。基本的には旧指導要領の深化であり、旧要領の簡明な表現を更に突き詰めて、内容を昇華させなくてはならないのは自明の理でしょう。

しかし、歴史総合という「政策的」な科目への対応は至難の業であり、「ファシリテーター」たる教員に求められているのは、教材研究を対象とした自助努力です。現場で使用されてる教科書内容は何れもが盛り沢山の百花繚乱ともいえる呈をなしており、歴史と向かい合う深い学びを考えた場合、いささか消化不良というか、総花的な観が過ぎると感じまふ。そこでは、「当然ながら従来のような通史学習を可能にする時間はなく、生徒の考察の前提となる知識をどのように組み立てていくのかが大きな課題」(下山忍 「学習指導要領の改訂－「歴史総合」の趣旨－ 『歴史と地理』266 2019) とされますが、問題なのは生徒の側に通史学習をさせる如何ではなく、指導する側の教員が的確に、その前提となる通史等の歴史理解を踏まえられているか否か、という点でしょう。「生徒に通史の要求をしないから教員も不要」では済まされず、およそ新科目の眼目である資(史)料操作にせよ、通史を前提とした深い歴史理解が求められます。果たして「通史への対応」がなされているのか、このような教員側の準備前提をおよそ容易く飛び越えたところにその困難性と、歴史に向かい合うことに対しての安易とさえ思える科目特性が感じられるのです。

また、教員側の自助努力という点については、敢えて、「サスティナブルな実践」という点をあげたいと思ひます。新科目開始に向けたこの間の多くの実践研究について、貴重な成果であったことは言を俟ちません。しかし、今求められるのは、所謂、研究授業等の公開を意識した「よそ行き」の実践ではなく、日常における均質で持続可能な実践です。教材研究の時間は無尽蔵ではなく、継続・汎用性のある、今後10年・20年先を見越した息の長い研究実践活動を想定すべきです。特に新指導要領のレベルから要求されるのは、メソッドよりも内容の理解であり、その点において、特に従来からの「欧米中心の世界史・日本史」についての弊は早々に是正されなくてはなりません、まだまだその意識は希薄と思われまふ。歴史認識における「無意識の弊害」を克服することは、新科目の実施の絶対不可欠の大前提であります。